

令和八年八月吉日初版作成

守護の神霊という存在

高嶋 善三郎

目次

- 守護の神霊という存在の意義・・・・・・・・・・・・・ 3
- 過去の聖者や仏陀が、幽界霊界がないと何故言われたか・・・ 5
- 法則の神と愛なる守護神・・・・・・・・・・・・・ 6
- 守護の神霊の導き方・・・・・・・・・・・・・ 7
- いかにしたら守護霊守護神に強く守られるか・・・ 9
- 守護霊守護神とぴったり一つにする・・・・・・・・・・ 11
- 私たち人間はどこへ行くところとしているのか・・・ 12

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブ
サイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。
よの分かりやすくするため、「感想があれば、
お聞かせください。」

次の連絡先にお問い合わせします。

（スマホ） 090-33346-6619

（メールアドレス） zensan@peach.ocn.ne.jp

守護の神霊という存在の意義

五井先生のみ教えにおいて、守護の神霊の存在やその働きは中心的概念であり、み教えを実践していく上において、明確に理解しておくことが大切です。

そこで、『白光誌から』をもとに、整理していきたいと思います。

守護の神霊という存在の意義について、端的に表現されているお言葉があります。まずそれを見てみましょう。

「人間がこの肉体界に誕生した理由は、どれだけ神のみ業の手助けをしてゆかかという事と、どれだけ本心を開発してゆかか、という事の二つにあるのである。

そういう役目のために、神界の計らいによって、各自専属の守護の神霊が配されているのであるから、いくら守護の神霊におすがりしても、これは当然許されることで、ひたすら守護神の加護を願うことは、賢明な生き方なのである。」(1970年4月号10ページ)

では、具体的にみましょう。

「守護神は神界の座にいて、守護霊は祖先の浄まった代表として、肉体に密着して援助しているのである。」(1956年1月号27ページ)

「守護霊守護神という名は、個人や人類の業想念を浄めつけ、消しつづけていて下さる、救済の神霊の意味である。」(1958年6月号9ページ)

「守護霊さんの上には守護神といって、大神様の人類救済の面で働いている大光明、つまり観世音菩薩とか不動明王とか呼ばれている神々がおられる。

その守護霊と、大光明である守護神との中間には、幾多の神格をもった守護者が存在して、人間を守っている。」(1957年10月号9ページ)

「イエスの名を呼べば救われるという、イエスの名は、即ち守護霊、守護神である。

仏教的に言い換えれば、守護霊守護神は阿弥陀様でもある。」(1958年6月号10ページ)

「現在は守護神がそのまま降りてきて、肉体に入っているのである。肉体人間として現われているのである。」(1959年2月号32ページ)

「あなた方の守護霊が背後から、うちの子をお願いします、といつも私に頼んでいる。その愛念に打たれて私は泣いてしまう、と五井先生はお

っしやっていた。「高橋」(1968年7月号53ページ)

「弘法大師は同行二人と言っている。仏と一緒にという意味であるが、二人だけでなく守護霊も守護神もいるわけである。」(1970年12月号5ページ)

「観世音菩薩という名も、その守護神の一つのひびきに名付けられた名称なのである。」(1973年5月号11ページ)

「業想念を消して下さる役目が、守護霊守護神なのである。たまった業を夢などで出して、消してくれるのである。」(1958年7月号9ページ)

「神は分霊魂の分生命の人間だけでは、この物質界の粗い波動の中で、神の子の完全性を現すことが出来ぬのをご承知で、人類が物質人間としてこの世に住みついた頃合を計って、人類の上に守護の神霊をつかわし、分霊魂、守護霊、守護神と一つにつながって、神本来の完全円満性を、この地球界の上にも、現し得るように計画されたのである。」(1961年5月号8ページ)

「現在では個人を守る守護の神霊も、国家を守る神霊も、すべて人類救済のために働き続ける救世の大光明の一員として、活動しようとしているのである。

現今の世界情勢の下では、人類の救済を度外視した個人の救われとい

うのは、無いからである。一度核戦争にでもなれば、個人の生活は一瞬に吹っ飛んでしまうのである。

であるから個人を守護している神霊の立場としても、個人と人類とは同時に救わなければならない、という救世の大光明の一員としての立場に立たなければ、真に自分たちの守っている肉体人間の、救済にはならないことになってくるのである。」(1962年9月号9ページ)

「守護霊守護神の加護というのは、自分の持てる力をフルに出して働けるようにさせて下さる。我が生命を生き生きと、生かし給えということろに、神の加護を願うのが本当なのである。」(1966年5月号28ページ)

「人間は肉体の自分一人で生きていると思っているが、守護霊守護神が一つになって、肉体を動かしているのである。」(1970年8月号26ページ)

「人類は神々の子として、この地球界において、神のみ心を現そうとしているのである。しかし現在はその過程にあるので、精神波動が物質波動に巻き込まれてゆき、神の存在さえ忘れかけている人々が多くなっているのである。それも宇宙神のみ心の中に計画済みのことで、その為に守護の神霊をつけているのである。」(1972年7月号11ページ)

「私は一口に守護神と申しているが、詳しくは救世の仕事そのものにたずさわっている守護神と、各個人個人の守護をしつづけている守護神とがあつて、地球ばかりでなく各星々の完成を助けて、大宇宙の運行に寄与しているのである。個人個人の守護神といっても、常に救世の神々と連れいして働いているのである。」(1973年5月号11ページ)

「神(直霊)としては人間内部にいらながらも、真理をわからせようとして、自らが分かれて守護神ともなり守護霊を作つて、外面的に人間に智慧を与え力を与え、業から守っているわけである。」(1974年3月号8ページ)

「指導霊とは守護霊とは別に、必要に応じてその人の背後につく、副守護霊ということである。正守護霊はその人の運命全体を司り守り、副守護霊の色あいによって、その人の職業が決まるのである。」(1974年12月号24ページ)

「地球に人類を誕生せしめた最初から、宇宙神は各神々に地球の守護を命じ、各守護神は古い魂から、順次守護霊として、各個人を守る役目を仰せつけたのである。」(1975年6月号15ページ)

「唯一神の創り主の神様がいろいろに分かれて、各守護神になっているわけである。そこで一番先に分れた守護神さん、大神さまのそばの守護

神さんが、うんと力が強いわけである。そして円形のピラミッドみたいになって、ズーツと下がってゆくわけである。」(1977年3月号16ページ)

「皆さんが一人で祈っていると思うけれども、実は守護霊守護神さんが常に応援して、祈らせてくれているわけである。守護霊守護神がエレベーターになり、皆さんの想いを天につないでいてくれるわけである。」(1979年11月号18ページ)

「生き死には守護神さんの権限だから、守護神さんに任せておけばいい。」(1980年7月号21ページ)

過去の聖者や仏陀が、幽界霊界がないと何故言われたか

守護神について、現在何故語られるようになったのか、言及されていません。

「なぜ聖者や仏陀が、幽界霊界のことや、霊魂のことも知っていながら、それらは無いと言ったのかというと、幽界のことにあまり興味をもつと魔にさらわれて危ないと思ったからである。今のように一人一人お浄するというのが、出来なかったから。」

なぜ出来なかったかというと、守護神がたくさんとまって、一人の器

に来ていなかったからである。例えば道元なら、道元の守護神を中心に4、5人の神霊が集まって、指導してただけであるから、一人一人を見きれなかったのである。だから最も危険が無い方法は、霊魂は無い、幽界霊界は無いと教えたのである。道元自身それを知っていたけれど、もし教えて誤って解釈されると危険だと思って、無し無しとやり、ただみ仏の中へ入れと教えたのである。昔はそれで仕方がなかったのである。現代は科学が波動説まで唱えてきたので、本当のことを全部くわしく教えなければならなくなって、私のようなものが出て来たのである。

という事は、守護神がたくさん集まっている人というのはいないのである。だいたいの人には2、3人の守護神が集まってやっているのであるが、私という器はどのような守護神でも集まって来られ、そして使えるのである。それが根本で、霊界や幽界の存在も教えるのである。」(19

59年9月9日29ページ)

法則の神と愛なる守護神

宇宙神には、法則の神としての神と、守護神としての神即ち人間と等しき愛念をもつ神という二つの現われがあり、この二つの区別がなされない、真の信仰はできないと、言及されています。

「法則の神と愛なる守護神とを区別しなかったこと、これが今までの宗教の盲点であった。」(1958年4月233ページ)

このお言葉について、『天と地をつなぐ者』174ページにおいて次のように説明されています。要約すると次のようになります。

「宇宙神には、法則の神としての神即ち宇宙に満ち満ちている生命という神と、守護神としての神即ち人間と等しき愛念をもつ神という二つの現われがあり、この二つの神の現われを一つ即ち法則の神としての現われと誤解したところに理論的宗教がもつ現実的矛盾がでてくる。

法則としての神にいくら頼みごとをしても聞き入れられるはずはない。法則は絶対に曲がらぬからである。法則のとおりに分の心を自分で乗せてゆかなければ、決して救われることはない。ところが、ひとたび法則をはずれた歩みに入った人が、自分だけでまたもこの法則の上に自分を還すことはほとんどでき得ないと思われるほどの難事である。

これでは神の必要もなければ、宗教の必要もなくなってくる。そこに付け入ってくるのが、低級なる現世利益のみの宗教である。そうした宗教では、その人の真の利益、魂の浄まりは、まるで無視して、ただ単なる目先の現世利益だけを得させる。それによって後にその人の魂がどのようにに苦しみ損ずるかは問題の外なのである。しかしすがってゆく人間に

とってはその場の苦しみだけを問題にしているのだから、その場がとにかくすくせれば、ありがたいご利益となるわけである。これが邪教の反乱となってゆく。

この原因は、正しいと称される宗教が、前にいったような誤りを意識せぬ理論的宗教論になっているからで、いかにその理論が正しそうに見えていても、その底に愛情を感じさせぬような法則論の宗教では、たとえ邪教であっても現世利益の多いほうに民衆はついてゆく。

そこで私（五井先生）は二つの宗教の流れを今日の宗教界にみているので、正しい宗教論の上に守護神という愛なる神の人類救済的指導力をおいたのである。」

「神のみ心の中に入ってゆくにしても、梯子あるいはエレベーターがないと入れないわけだ。今までの宗教というのは、祈りは教えるけれども、大神様の中に入ってゆくエレベーターがないわけである。

そこで私は天と地をつなぐもの、光の柱、光のエレベーターを発表したのである。天と地をつなぐものは何かというと、地の方に深く強くつなぐものは守護霊だし、天の方に深くつなぐものは守護神なのである。」

（1961年7月号50ページ）

守護の神霊の導き方

守護の神霊がどのような考えのもと指導されているのか、言及されています。

「皆さんの守護霊守護神も、私の直霊の了解を得て、私の肉体の背後にいるのである。そしてあなた方に、私を通して種々教えたり、導いたりしているのである。」（1955年4月号23ページ）

「法則は曲げられないが、法則の軌道の流れにまで、地球人類をもっていつて下せることは、守護の神霊の力をもってすれば出来るのである。」

（1961年2月号8ページ）

「守護神の導き方というのは、ただ甘やかして業をつけたままで、幸せにしようと思っていない。肉体界を抜けて霊界なり幽界に行く場合、悪いくせを持ったままで行くと、うんと痛い目を見るのである。

幽界というのは、あいつをなぐりたいと思ったとき、パーンと自分がなぐられてしまう。波が瞬時に帰ってくる。

自分のやろうとしたことが、帰ってくるわけである。だから一寸でも業想念があれば、それだけ痛い目を見る。

だから自分本位の想いがすっかり無くなるように、守護神はしたいの

である。自分の守っている人間の自我欲望がすっかり無くなって、きれいな魂になるように一生懸命やっている。」「(1963年3月号20ページ)

「霊界に行くと守護霊さんは退く。退くということは、分霊魂と一緒になってしまう場合があるのである。

次元が一つ高くなって、守護神が直接守る形になる。」「(1965年5月号74ページ)

「地球界に渦まいている業の波を、守護霊守護神がよけてくれていて、それでわずかに入って来る業の波でさえも、オタオタして人間は生きているわけである。だから守護霊守護神として働いている力が90%、分霊の肉体側の力というのは、わずか10%ということなのである。」「

(1964年5月号15ページ)

「守護霊守護神さんはどうしたら我が子(肉体人間のこと)を、苦しみ少なく立派に、本心を聞くことが出来るかと思って、苦心惨憺しているところがないかい、お前こつしなさいと言つのに、肉体人間の方では逆の方に行ってしまう。仕方がないから一つパーンとびんなぐって、引きつけるということになるのである。

その時に病気になるったり、不幸になったりするかも知れないけれど、それで消えて行く姿になって神の法則に乗るわけである。」「(1966年

5月号20ページ)

「自分の運命というのは、必ず自分が作るものであって、神様はその人の応援をするわけである。といっても、大神様は光を当てるだけで、守護霊守護神さんが、神様の道を外れているとその人を引っばって、道に立たせてくれるわけなのである。」「(1973年1月号23ページ)

「各人を守っている守護の神霊が、様々な環境に各人を置いて、その人が永遠の生命を一日も早く、自己のものに出来るような経験を与えるのである。

そういう経験を過去世から種々と与えられながら、人間は成長して行くのである。」「(1967年1月号5ページ)

「私の所に来る人などでも、あまり業想念が深すぎる人は、守護の神霊も守りきるのに容易ではなく、といって極端に業の消滅を計れば、あまりにも肉体の苦痛が多かったりするので、でき得る限りその霊身に被守護体の業波動を背負い、みずからもしっかり光明をくらせて、私の所に運んで来ることもあるのである。

そこで私を取り巻く神霊方が、まずその守護霊の霊身を浄め、守護霊を生き生きとさせるのである。それ程までに守護霊が人間を守っているのであるが、大方の人間はその愛の行為を知らないのである。」「(1966

8年9月号12ページ)

「出来ないところ足りないところは、守護霊さん守護神さんをお願いして任せるのである。守護霊さん守護神さんと言えば、想いが近づくので、より守りやすくなるのである。それで危いところを助けてくれる。また力を貸してくれるのである。例えば、ある人のことを思っている。けれども20%しか思えない。

ところが守護霊さん守護神さんよろしく願いますと頼んでいると、自分の守護霊守護神の方から、向うの守護霊守護神に力を貸すわけである。肉体の自分は20%の力しか無いけれど、守護霊守護神のひびきが50%加わるから、合計70%も向うに力がゆくわけである。」「(1974年4月号18ページ)

「いつも長所と短所が混って、この世は出来ているわけなのである。それは何故かというと、この地球世界、物質世界というものは、本当のものが出来てしまったら、存続しないように出来ているわけなのである。それで足りない所は、足りないでいいのである。欠点は欠点で仕方がない。出来るだけ長所を伸ばして、欠点を無くするようにすることである。

その欠点を補って余りあるものが、守護霊守護神の加護なのである。」「

(1974年9月号20ページ)

「守護霊さんは自分の力の及ばぬ時は、守護神さんに援助を求めて、あくまで守っている孫を立派にしてゆこうとしているのである。」「(1977年10月号11ページ)

「肉体という波動をまとうと、生命が働きにくくなるから、それで守護霊守護神がいて守る。そのマイナス分だけを穴埋めするように出来るわけなのである。」「(1977年12月号17ページ)

いかにしたら守護霊守護神に強く守りつづけるか

守護の神霊の守りをどのように受けとめたら、その恩恵を受けられるかについて言及されています。

「今日では肉体人間に守護の神霊の守りに気付かせて、自分たち神霊の方に想いを向けさせ、浄めの光明を速やかに流れ入りやすいようにしてゆかなければ、地球全体として滅びてしまうところまで、業想念波動が浮かび上がって来てしまったのである。

肉体人間の方で守護の神霊への感謝を続けていることが、とれほど守護の神霊方の守りを、強めているか知れないのである。」「(1996年9月号9ページ)

「自分が一生懸命つくっていると、ふつう常識では出来ないようなことも出来てくる。それは何故かという点、守護霊守護神が応援してくれることなのである。」

人事を尽さないと応援しにくい。そうすると守護の神霊が、より強く大きく育てるために、辛いことや嫌なことを通して、いろいろと錬磨するという形になってくる。そこで嫌でも人事を尽くさなければならぬような立場に自然になってくる。

だから守護霊守護神に感謝しながら、自分の置かれた立場で、一生懸命誠心誠意を尽くして努力することが、人間として尊いのである。」「(1966年5月号27ページ)

「常に人間は守護霊守護神に守られているのである。守護の神霊と一体であることを知らなければいけない。」

「ああ、私は守護霊守護神の光の中で歩いているのだ、生活しているのだ」という信念をお持ちなさい。

そうすると、どんなに偉い人に会っても恐くない。どんな災難にぶつかっても恐れない。どんな暗闇を歩いても恐くない、という強い人間になる。普通の人がよくいに災難をこうむるところを、守護霊守護神と一緒になっていると、災難が軽く済むのである。これを固く信じるといい

のである。」「(1970年6月号19ページ)

「守護霊守護神に守られていることを、信じていればいる程、加護は強いのである。信じているという事は、守護霊守護神とピタリと一つにっいているという事である。」「(1967年3月号19ページ)

「自分が守護霊守護神に余計に守られたいならば、人のために尽くすことである。恩を感じて向(こ)の守護霊守護神も守ってくれるのである。」「

(1970年6月号19ページ)

「問題は任せるか、任せないかなのである。任せれば守護霊守護神と一体になるから、宇宙神にそのままながってしまふのである。宇宙神の法則に乗ってしまうわけである。つまり守護霊守護神が乗せてくれるのである。」「(1970年8月号27ページ)

「守護の神霊の加護によって、肉体人間は内面の神性を発揮してゆくのであって、この守護の神霊が守りやすく働きやすいように、肉体の人間の側からもってゆくことが大事なのである。そうすることによって、肉体という粗い波動体をまといながらも、神霊の働きに次第に近づくことが出来るようになるのである。」「(1970年4月号7ページ)

「何をするのでも」「守護霊守護神が守っていて下さるのだな」「

失敗すれば失敗したで」「あー、これは過去世の因縁が消えていって、

よりいいものが現われて来るのだな」

得をすれば得をするで「あー、有難い。守護霊さん守護神さんありがとうございます」と礼を言えがいい。

常に守護霊守護神への感謝で生きていることが、一番大事である。」

(1970年8月号27ページ)

「皆さんが一生懸命平和の祈りをする、守護霊さん守護神さんありがとうございますとやっていると、守護霊さん守護神さんの位が、知らない間に高くなってくるのである。位が高くなるとそれだけ力が強くなり、肉体の自分が守られやすいという事になるわけである。」(1977年3月号17ページ)

「一番かんたんに、守護霊守護神さんが自分の味方として感じるには、自分の体が大きくなっていると思えばいいのである。自分が五尺何寸とすると、その二周りも三周りも、周りを取りまいて守っていて下さる、というように感じるのが一番いいと思う。」(1974年4月号20ページ)

守護霊守護神とぴったりにする

守護の神霊と一体化されると、どのようなのか、どのように感じるかができるか、言及されています。

「肉体界のあなたが、天の本体(直霊)もしくは守護霊守護神に、任せきった空の状態であれば、あなたの守護霊守護神は持てる全ての力を世界、人類の救済の浄めのために出せるが、人間は天の本体との間を、絶え間なく業の波でへだててしまっているのである。その浄めに力をさかれ、大きな浄め、世界人類救済の方に、全力を出し得ない状態に置かれているのである。」

だから自分の想念を、守護霊守護神とぴったり一つにするように、しきりに想うことである。

そうすると、守護霊守護神の方から、こちらに降ってくる必要がなく、こちらの肉体側から守護霊守護神の方に昇ってゆくことになり、浄めに非常な力が省け、余裕が出来るのである。その余裕力が、世界人類という広い大きな浄めの方にまわせるわけなのである。

そこでもう一つ突き進んで、肉体のこちらからも世界平和の祈りをする、その祈りは天の本体(直霊)や守護霊守護神と等しき祈りになるので、その瞬間は肉体を包む業(汚れ)は一挙に突破されて、神我一体となるのである。」(1955年5月号25ページ)

「私どもの加護の力を、大生命である神の人間の面への守護の力、つまり守護神と、祖先の子孫を守り通したいという守護の想い、つまり守護

霊との2つに分け、感謝を捧げる行をしているのである。

そうすると肉体人間と守護霊守護神との、障害のないまっすぐなつながりが出来て、肉体内の霊魂（神の分生命）と、外面的な力（神）、大生命との一体感が次第に出来てきて、安心立命の生活を、地上界においても霊界においても出来るようになるのである。」（1957年11月号1ページ）

「個人個人が世界平和の祈りをすることによって、その個人の守護の神霊も、救世の大光明の仲間入りをして、働くことになるのである。

そうするとそれまで単独で個人救済にあたっていた守護霊守護神が、人類救済の大光明の大きな光明力と一つになって、事にあたればいつでも救世の大光明の大きな救いの力を、流し入れてもらえるという事になり、個人も得をし、人類全体としても一人でも多くの人の協力を得られた事になり、一挙両得というか、個人人類同時成道という事になって来るのである。」（1966年2月号8ページ）

「守護霊守護神さんの中に、自分の消えてゆく姿の想いを、みんな投げ入れてしまいなさい。そうすれば守護霊守護神さんの方で、その想いを全部すくい取って消して下さるのだ、というわけである。

守護霊守護神の中に、自分の想いを入れてしまふ。それを一歩深めて、

守護霊守護神と共に、世界人類の幸せを自分たちのものにしよう、世界を平和にしようという菩薩の心になって、世界平和の祈りをする。そうすると業生の自分がいつの間にか守護霊守護神と一つになり、世界平和の祈りをしている。

それをくり返していると、いつの間にか自分の潜在意識にたまっていた悪い想いが、どんどん消えてしまつて、知らない間に神の子である本当の自分が、そこに現われてくる。そして光り輝くわけである。」（1970年6月号16ページ）

「守護霊守護神の中に、世界平和の祈りの中に全部入ってしまうと、今度は肉体の自分がやっていると思うけれど、実は守護の神霊がそのままスースーと、動かしてくれているのがわかって来る。」（1970年11月号13ページ）

私たち人間はどう行いつついるのか

私たちが、守護の神霊と一体化になるという天命を完つすると、あとどのような世界にいくのか言及されています。

「生まれ更りしていくうちに、最後に自分の分霊というものと、守護霊守護神とが一つになってしまふ。神我一体の境地になってくると、もう

再び生まれ更ることもなくなって神界で働く。

その時、その人は守護神でもある直霊でもある。全部が総合してしまっわけ。そうなった時に如来という。それがそのままこの世に出て来て、働く場合には菩薩という。」「(1961年7月号17ページ)

「守護霊というのは祖先の悟った魂。守護神というのは肉体に生まれないで、初めから守護神として、直霊から分かれているのである。

守護霊の格が上がり、守護神に昇格してゆくこともずいぶんあるのである。世界平和の祈りの会員の中には、今まで守護霊だったのが、守護神になったのがずいぶんある。」「(1962年9月号15ページ)

「守護霊守護神と一体になるような自分になれば、神の子の姿を現わせるわけなのである。

守護神と自分が全く一つになると、守護神が自分の中に一つに入ってしまう。そして直霊、宇宙神とパッと一つにつながってしまうのである。

そうなる自由自我、何も自分の想いがない。そのまま動くことが、みんな神のみ心そのままになっているというようになる。そういう人を如来という。」「(1963年2月号16ページ)

「守護神の加護によって悟り、霊界に帰り、守護神の手助けをして働いている人を守護霊という。」「(1967年8月号21ページ)

「人類が減びてしまっは大変であると思われて、肉体人間が出来た初めから、直霊が分かれて守護神になって、陰になり日向になりながら守ったわけである。

初めのうちは、ちゃんと守護神が姿を現わして、人間と話し合って事を運んだりしたことがあるのである。

それは何故かという、物質に慣れないで、神霊のひびきそのままにいたから、お互いにわかり合っただけである。」「(1972年9月号18ページ)

「質問」宇宙人が働きになる時、守護霊守護神はどうなるのですか。

「五井先生」肉体人間そのものとなるのである。今皆さんがここにいるのも守護霊守護神なのである。世界平和の祈りが守護神なので、光となっ働くのである。それで初めて、人間神の子となるのである。」「(1959年8月号33ページ)

私たち人間は、肉体の眼には見えないが、守護の神霊に生まれる前から守られています。守護の神霊がどのような考えで守ってくたさっているかを気づくことが大切です。気づくことにより、人間は無限に進化していけることをあらためて知らされた思いです。